

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第159号（2019年8月）

ヒロ爺 ふるさとの風に戯れて

一行に呟く（1）

白井啓治

★ 吾が一行の呟き…

詩文に興味を持ち、書き始めたのは小学四・五年生頃であった。教科書にツルゲーネフの詩が出ていてそれを読んだのがきっかけであったように思う。その詩がどんな詩であったのかは全く思い出せないが、ツルゲーネフであったことだけは確りと覚えている。

その授業の中で、詩を書かされ、それが褒められたことを覚えている。日常の授業の中で教師の誉め言葉だから、ヨイショして興味を持ってもらおうというのが意図ではあったと思う。しかし、その誉め言葉が小生の気持ちに深く突き刺さり、以後、思いついては詩と称してはノートに書いていた。

その詩は、まっとうに詩と呼べるものではなく、短いということだけが気に入って、母が行っていた俳句に似せて、一行の詩のようなものを書いてきた。この頃は未だ種田山頭火などの俳人も知らなかったのもっぱら分かりやすく紹介された小林一茶の句などを真似ていたように思う。

私が突然に詩文に目覚めたのは、高校生になつたときであった。何故だか、本屋で立ち読みした

ランボーの詩から放銃された雷光に心臓を撃ち抜かれ、のめり込んでいったのだった。同時に、川東碧梧桐（かわひがしへきごとう）、種田山頭火、新しい視点での小林一茶を知り、一休宗純の詩文に出合ったことで、気分はすっかり詩人へと頭から転落していったのであった。

母のやっていた俳句を古臭いという思いで見えていなかった小生が、小林一茶のいう「わしは花鳥風月だの言わん。蚤虱、そこいらを駆けまわる餓鬼目等までみんな句にしてやった」を味方に勝手な新傾向の句を呟くようになったのである。そのもつとも大きく影響を貰ったのは、クラスの担任であった国語教師から貰った一枚の短冊であった。

「コスモスは盛り 永仁の壺は不問」

この短冊に書かれた句が、小生の一行へ呟く詩文「一行に呟く…」を後押ししてくれたのであった。

★ 心模様…

これという目的もなく歩いてみると、風がやってきていろいろなことを囁き、今日の私を教えて

くれる。嬉しいとき、哀しいとき、寂しいとき、切ないとき、折々の心模様を見抜いて囁いてくれる。

風の自由自在の囁きを聞いていると、どんな自分でも納得することができる。時には意地悪な囁きもするが、それはそれで納得させられる。だから毎日、風に尋ねて散歩する。風の納得させられたら小さく自分に呟いて聞かせる。

―風にのって時を漂い言葉に遊ぶ―

・ 雑木林を抜けると春がいた

菜の花の風を黄色く塗った

・ 昨日 枯葉を押し上げていた竹の子

今日は天を突いている

・ 春の一本道 桃色吐息

・ 草取りの婆さんに道を尋ねたら

横を向かれた

・ 今日の風は優しくかった

いつもより余計に歩いた

・ そんなに急いで時の使うなと雑木林のいう

・ この道どこまで行くのかと春の陽に聞く

しぐるるまでと風のいう

・ 疲れたら休めと野の花のいう

・ 小声に歌ったら笹の葉の拍手をしてくれた

・ みわたせば思い思いにふるさとの風

（本稿は故白井啓治氏が遺された遺稿より抜粋して掲載しています。氏は本年6月28日に逝去されました。慎んでご冥福をお祈りいたします）

◎人は死ぬと魂(たましい)はどうなるか？
八十路を超え、更に癌を抱え、8月ともなると、
つい死後の事など深く思いわずらう。魂とはなん
じゃ？ 生きた証に何か残せるのか？

人に限らず、恐らく動植物全て生命のあつた者
は、もつと長く生き延びて、あらん限りを全うし
たかたに相違ない。仲間同士寄り添って、ワイ
のワイの騒いでその日を過ごしたかたに相違な
い。それをヒトという怪物の権力に支配され、青
春真っ盛りの若い牛や豚が、ヒトの食用として無
残にも次から次と殺される。それが許されぬとい
うのであれば、ならばお前は何を食って生きてい
けばよいのか。こんな大きな矛盾も返答に困る。
これは「魂」は動物に限定しての存在に固執して
言えば…という点に拘っているが、さらに私は植
物にも魂は存在すると、視野を広げ過ぎたため、
ますます混乱し何が何だか分からなくなつてしま
つた。結局植物食だけでは人間は生きていけそう
にもないので、無理な考えは止した方がよさそう
だ。

動物を殺さなければ、ヒトは生きてはいけない。
進化の過程がそうなっている。腸の長さを見れば
人類は肉食獣と草食獣の中間の腸の長さである。
狼や猫よりはるかに長いし、牛や馬よりはるかに
短い。モグラなどの食虫目からの分岐である。確
かに人類の祖先は貝や魚の魚介類、カタツムリや
ザリガニから貴重なタンパク源を摂取して生きて
きた。特に近年は精力剤としてスッポン、マムシ、
野鳥などのほかトカゲやヤモリ等、更に猪や熊な
ど強精材として多用されている。又夏バテ防止に
と、うなぎや新鯉など人類強化の基礎となつた。

そしてさらに最近では、蜂の子、イナゴ、コオ
ロギ迄、居酒屋の酒のつまみらしい。蛋白だけで
はなくカルシウムや鉄分、各種ビタミン剤迄、
昆虫からは多くの栄養がもたらされる。完全な草食動
物なら、北アメリカで進化して絶滅した「馬」は、
北米の草には必須アミノ酸の何かが不足して体
の大きくなつた馬体を支えきれなくなり馬は滅び
た。モンゴロイドがベーリング地峡を渡り、北米
に渡つたのと全く逆向きに、ウマは同じベーリン
グ地峡を渡り、ユーラシアで繁栄した。人類も草
食動物でなくてしみじみ良かったと思う。
そんな訳で可哀そうではあるが、牛や豚は
人類の犠牲になり、誠に気の毒である。

*

元を糺せば生物とは、みな同じ一個の単細胞生
物が進化した成れの果て。個々の単細胞一個一個
は、か弱き、見るからに力のなさそうな単純な個々
の細胞であつたはず。地球が誕生して46億年。
生命が誕生して約40億年。それを、4分の3に
相当する30億年続けて、ある日突然、モタモタ
していると隣の細胞に呑み込まれるぞ、ならば俺
たちは同盟を組んで、単細胞2個が手を取り合っ
てくつついて、倍の大きさになれば、そう簡単に
仲間食われることにはあるまい…という事で、2
倍体の細胞が出来上がり、それが4倍体(染色体
数は2倍体のまま)、16倍体、256倍体と、手
を組んで個々の細胞は職業を分担して、高機能の
個体が生じたに相違ない。最終的に成人人体の細
胞数は、60兆個の生物へと進化した。

さて、細胞一個一個の時代、魂とは何が何して
この世にあらわれたか。「魂」とは広辞苑によれば
動物の体内に宿つて心の働きを司ると考えられる
もの。古来多く、肉体を離れても存在するとし、

靈魂、精霊を言う。又精神力、思慮分別気力など
を言う。さてその魂が、個体が生きていく時には
当然その個体に宿り、その個体に生きていく道を
探し、何が己の生存に最も適しているか視野を探
し、それが魂の活躍の場なのである。できるだ
け理想の姿に近づけるよう活動の方針を傾けてい
く。それが魂の存在理由なのである。当然生き
ている間の出来事であり、命をなくせばすべては
「無」に帰すると考へるのも無理はない。ネコに
喰われたネズミに、どんな高尚な精神があつたに
してもそれが、子孫のために、品種の改良に
何らかの利点があれば、それは儲けもの。

そう考へるが、あるネズミの1個体がどんな努
力をささげたにしろ、死んだ鼠の精神(魂)がのちの
世にいかほどの種の進化のために何の役に立つた
と考へるのか。
そこでネズミに関し、死んだ鼠の魂はどうなる
か？私に言わせれば、生き残つた鼠に、何か工夫
があり(これは死んだ鼠と生存時間は共有)生き
残つたネズミに何らかの利益をもたらすなら、死
んだ鼠の魂が生き残つたネズミに何らかの恩恵を
もたらしたことになる。

この小さな工夫の蓄積が私は「進化」であると思
う。友達の死は生き残つた者の生存への参考と
なり、その積み重ねが種の進化であると思う。

考へてみれば鼠Aは、逃げる途中左に身をひる
がえすふりをして右にかじを取り切れなかった。
重量の重い猫は本来遠心力でそのまま左に行つて
しまったが、重量の軽い鼠Bはとっさに右に身を
ひるがえす機転が利き、実は左に走る。このよう
な小さな出来事の繰り返しが進化なのである。進
化とは、このような小さな出来事の積み重ねによ

り、大きな進化へとつながったものと思える。死んだ動物でも種の進化にながしか役立っている。AはBの生存に何らかの役に立ったことになる。こうなればAの魂に「意志」がないとどうして云えますか？ 命あらん限り、命あるものは全て、「意志」を持つていると考えるのは普通であろう。

植物の話になるが、桜など一定の決まりがあり、花が咲くためのある温度がセットになっており、ある寒さを経験したのち、ある温暖を経験しないと花は咲かない：みたいな掟があるらしい。夏に花芽形成、秋々冬休眠。2月休眠打破、積算温度、そして開花。全ていい加減なものではないらしい。また、開花には調整役の木があるらしい。全てその木（親分）に従うらしい。経験の蓄積から、桜はリーダーに従うらしい。物理・化学だけではないらしい。広辞苑も植物にも魂はあるらしいと書き換える必要があるであろう。何らかの調整が行われ、木々の間で何らかの意志の疎通があるらしい。

*

さて人間の死後の魂。これは決して死ねば終わりではないと信ずる。なぜならば、トルストイ・武者小路実篤は、今から60年前、私にあれだけ大きなショックを与えておいて、今なお以前と同じ、衝撃を与え続けているのだから、

一つも死んだり、ちじこまったりなどしていない。千の風になって空を駆け回っている。墓地で眠つてなどない筈だ。文学だけではない。絵画だつてオーケストラだつて。百年前の宮大工による寺院建築など、決して古びてはいない。近年岩手県の花巻温泉で、旅館、そのものが、100年も昔に全て宮大工により建築されたという素晴らしい温泉旅館に一泊した。なんと申しましようか、

あの重厚なつくり、ただただ啞然とするばかり。ふろの湯などどうでも良い。あの建物を見るばかりで何万円にも相当する。古人のあの精神の重厚さに本当に驚かされ、感服あるのみ。それほど古人の魂は今なお、現代人に大きな刺激を与え続けている。現代人にしみじみ語り掛けてくる。見る者の魂を揺さぶっている。見る者の眼がどこを向いているかによる。日光の彫刻達は、何百年経とうが、いまだに新鮮な感覚で話しかけてくる。こちらがどう受け止めるかである。

*

アレクシスカレル。アメリカで活動、1912年ノーベル生理学賞受賞。著書に「人間この未知なるもの」。私が9歳の時亡くなっているフランスの医師・生理学者。私がわが人生で最も大きな影響を受けた著者と言える。人間とはいったい何者なのか。生理学的に人間というものを徹底的に分析・解明を図った書。100年前の書であるが、今でも新鮮で、孫たちに勧めている本である。17歳で結核の病床にあつた私にとってあのように衝撃的で、人間というものを深く分析した書を他に知らない。人生で最も感動を受けた書と問われれば第一に私は「人間この未知なるもの」この書を指名する。

人間とはこれほどまでに、内容は濃いものなのであるから、死にましたハイそれですべては終了。そんな簡単なものではないと信じる。中身の深かったものほど死してなお、いつまでも後世に影響を与え続けている。魂は永久に消え去らない。名を挙げた諸々の著者たちは、話しかけられれば話を永久に続けるものなのである。そのうちのあるものは、メンタル面で、今でも私に強く働きかけ、会話を求めてきている。対応の如何により、

死者は話を続けるかどうかは此方の対応次第という事なのである。サッカーの試合で、フィジカルがどうの、メンタルがどうのと言われるが、当然両者は一致したもので、両者同時の現象であるはず。之から何年後にはサッカー解説でフィジカル・メンタルの分離した評論はなされなくなるであろう。精神と肉体は、一致したものと言う見方が、当然という事になるであろう。いずれにしても死者の言行・行動というものは、その死者と向き合うこちら側の言行・行動によって、著者側の返答が変わる故、そう考えると、こちら側のレベル如何によって回答も異なる。

そう考えると、こちら側の刃物の研ぎ具合、偉大な鉾の前の楯、磨き具合によってその著書の返答も異なる。両者拮抗していれば闊達な議論もされるにちがいない。

偉大な著者であるか否かは、こちら側が深く、物を考えているか否かに係っているかによるのである。偉大な著者は偉大な読者に向き合っているかどうかにかかっているであろう。

従つて偉大な鉾は偉大な盾によってその存在価値が上がる。偉大なる矛盾とは矛・楯共に偉大でなければ成立しない。それにしても私にとつて片目を失つたのは何とも言えない損失であつた。疲れる為、なんとも読書ができなくなった。枕元の偉大な著者達に、ああなんと詫びてよいやら。

読者の魂が死したる状況なら、著者の魂も闊達とは言えない。両者闊達な状況にあつてこそ、互いの魂は元氣潑刺。云わばすでに亡き人の魂というものは即「顧問」のようなものではなからうか。後輩たちが懸命に働いて会を運営しているならば、著者という偉大なる顧問も問われれば即座に最良の回答を応えるであろう。

＊

◎「中毒性表皮壊死症」こんな病名初めて聞いたが、どうやらこの世に存在するらしい。体表面の皮膚がただれ落ちて、全身「お岩」様みたいになった人のどこに靈魂がどのように存在するかの話から、信じられないような靈魂話が浮かび上がってきた。

100万人当たり、1.3人の確率で発症する。この病気はこの世で、何かにと悪いことを繰り返した人が、ある日突然に本病にかかり、あの世の地獄を自らの目ではっきり見てこの世に帰ってくる。この世には最後は「地獄」という逃げ道があるが、本当のあの世の地獄には逃げ道は存在しない。あの世の本物の地獄とは、とても言葉には表せない、それはそれは残酷なもの。むしろ、この世の生き地獄の方がはるかに甘い。

さてこんな話が真なら、科学として正式に登場し新聞や科学雑誌に載ってもよさそうだが、全く見られないとは科学的に立証できないのか？それとも確率が低すぎる。日本では毎年100万人位生まれるから、それが全部成人して、かなりの悪事を働いてもそれほど人口にはならないであろう。ましてや女性と来てはそんなに残忍な犯罪を起こす人口に達しにくからう。それゆえ女性の本病発生に至る確率は、女性は男性に比べたら、100分の1ぐらいであろうか。圧倒的に少ないだろうし概算すると日本で50年間に一人いるかどうかの低確率。もしかしたら100年間に一人か？診断した医師がそんな病名を知っていたかどうか？患者も正直に話したかどうかも確立を低くする。「地獄」などというネットを見ていたらこんな恐ろしいことが書いてあった。

ところが最近、近隣民家で、夜寝ようとしたら

布団の中にへびがいた。慌ててどかさうとしたら腕を噛まれ、腫れて来たので救急車を呼んだが、蛇の種類や経過はわかっていない。昔からへびは突如露われたりすれば残酷にも殺され捨てられた。ここに野生動物との葛藤の問題が生じ、強い者は弱い物をすぐ殺す。当然ここにも魂の葛藤の問題が起き、すぐ「祟り」の話などに発展する。つまらぬ問題に発展しないよう戸締りだけは厳重に心掛けるべきであろう。

＊

以上大分、脱線は多かったが、生物の「魂」について触れた。植物にさえ、魂はあるらしいので、増して人間においては、根も深く、精密な存在であるらしい。しかし人間だけに与えられた特別の存在ではないらしいから、他の生物と接触するときには、希望を持った竹の子の魂みたいに、魂をまっしぐらに、天に向かって伸びようとしている傍からその首元をバツサリ撃ち取るのだから、命をいただくにあたっては、かなり謙虚な気持ちで頂くべきであろう。

一方戦争は、民族と民族との魂の戦いであり、魂のより執念深い方が、勝利を収めるに違いない。人口過剰気味の今日、一定面積に生き抜くためには、相手の先祖が築いた文化・文明に勝るとも劣らない科学力・気力をもってして戦うことになるだろう。こうして人類は幾多の戦争を繰り返してきた。戦に負ければ、死者は死んでも諦めがつくまい。その執念が積み重なって人類が戦争に費やしたエネルギー総括は筆舌に尽くしがたい。こうして重ねたエネルギーが次世代へ積み重なり新たな戦争へと繋がっていくのだろう。例えばトーマロコシの進化は、A種は皮は少々堅いが、甘みは抜群。病虫害にも強そうなので、この土地の地場

産業として定着させようという事になる。そんな諸々の創意工夫が国力の差となり有力国にのし上がっていくことになる。しかし戦争のためのエネルギーの積み重ねは、こんなあほなことではない。

サルは縄張り争いのエネルギー蓄積じゃあるまいしサルを卒業して人間になったのなら、もう少しましな世界に展開していてもよさそうなものだ。死んでもなお子孫に残っているこのエネルギーは、もつと高級なものに使われたらよろしい。とにかく戦争を脳ミソに置かなくてよい人類らしい真の進化の方向を遂げたいものだ。

以上は六月初めに書いたもので、白井先生のご落命とは関係ない。白井先生がこんな短い間に

お亡くなりになるとは夢にも思わなかった。先生が我々風の会員に示された教訓は真に素晴らしいもの。自己責任で何を書いてもよろしい。私の様に長い役人生活で、頭を押さえつけられていたものにとつて、天にも昇る展開であった。心の底から感謝申し上げます。先生も、どうかあの世でご休心の上、安らかにお休みください。風の会の今後は、木村さんを中心に一致団結の上、皆で力を合わせ頑張つて参ります。



地域に眠る埋もれた歴史(52) 木村 進 【石岡市内の社寺紹介】 二十三夜尊

石岡の香丸町の柿岡街道入口信号を若宮八幡宮方面に曲がり青木神社のさらに先に行くくと右側に「二十三夜尊」とかかれた建物がある。二十三夜というのは真夜中頃に出る月で、昔はこの月の出を待つて地区の男たちが集まり飲食を共にした。その集まりを二十三夜講といった。各地に二十三夜尊の大きな石碑が残っているが、こうして二十三夜尊を祭る大きな社は潮来にもあるが少ないようだ。



通りから奥に続く参道があるが、これは神社ではなく寺だという。無住ではあるが、近所の講中で管理維持している。また昔は、月の23日に町内で集まり神を祀り、飲食雑談して月の出を待った。

特に11月23日は、霜月三夜と呼ばれ、大師講の日に当たり重要視されている。ご本尊は、大乘仏教の代表的な勢至菩薩である。月待ち行事として女性たちの集まりは二十三夜ではなく、十九夜だったようで、こちらは如意輪観音などが祀られるようだ。

十年ほど前まで「仲の湯」という銭湯が社のすぐ右側にあり、県内でも最後まで頑張っていたが、今は電柱に案内板が残っているだけである。大銀杏の切り株(樹齢100年以上)がある。十数年前まで高さ10m程上まで残っていたという。またしばらく前までは、縁日には、入口部に出店(屋台)もたくさん出たが、今はほとんど出ることはなくなった。また本堂の左手にはお札を売っていた小屋もあったが、銭湯とともに止めてしまった。

地元の方に話を聞くと、大銀杏の切り株の地下にトンネルが通っているとされているそうだ。これが府中城の七つの抜け穴の一つと考えられており、城のほうからここを通過して泉町の方まで続いていたという。

石岡府中の七稻荷

石岡市内にはたくさんのお宮がありました。石岡の市史などにも天保期(1830-1843年)に書かれた手書きの府中町絵図(鈴木彬夫氏所蔵)があり、この地図には、今の旧355号線(水戸街道)が中町から香丸町を通過して泉町の方に曲がる突き当りに千手院の大きな寺院があり、国分寺はその横に小さく描かれています。

今は、この通りは笠間の方に続いています。今時はこの千手院を迂回していたようです。今の国

分寺の境内の中に、この千手院の山門が残されているだけで、いつの間にか千手院は無くなってしまいました。

また、この地図に多くの稲荷神社が書かれています。稲荷神社が10か所も府中の町の中にありました。

稲荷神社は府中七稲荷といわれていた記録があり、この七稲荷のうち、仲之内町の福德稲荷、金丸町の鈴宮稲荷をはじめ、青木町の青木稲荷、守木町の天之宮稲荷、守横町の宇迦魂稲荷は絵図に示された位置に現存しています。

しかし、中町の稲荷は金刀比羅宮に合祀され、香丸町の稲荷は橋本旅館(ホテル橋本楼)の南端にあったそうですが総社宮に合祀されたといえます。

これらの稲荷の多くは「正一位」と称しています。これは正一位の伏見稲荷大社より勧請を受けた稲荷神社であることを表しています。

このように、石岡の稲荷神社は、400年ほどの歴史があり、石岡の旧町ごとに存在したのです。これらは、各町住民の結束を図る働きをしたものと考えられます。

このようなこともお祭りの年番制などの結末にも影響を与えているのかもしれませんが。



* * *

ふるさと風の会の主査で脚本家の白井啓治（ひろじ）さんのお別れ会が7月1日あり出席した。氏とつながりの深い方が中心のお別れ告別式であったが、多くの方に参列していただきこれまでにない会となった。

お棺にたくさんのお花束を入れながら

・疲れたら休めと野の花のいう

という師の一行文が浮かんで来た。先生、安らかにお休みください。これからの風の会の継続を師の前で誓ってきたが、私にはこれは全く自信もない。

白井先生の亡くなられたのは日本列島を季節はずれの台風が横切った日であった（6月28日）。この風に乗ってどこかへ飛んで行かれたのだろうか？

今夜は久しぶりに寝付けないので、娘夫婦からもらったヨーロッパのウイスキーをちびちび飲みながらこの記事を書いている。こんなに目がさえてしまったことは本当に久しぶりだ。

風の会の会報に書き続けていた巻頭の中に必ず一行文を入れていたので昔の物をいくつか今読み返してみた。そしてその良さが今頃になって心にしみてきている。なんてこった。まったくの出来の悪い弟子であったことか、我ながら情けない。先日、私のブログで三愚集という小林一茶の句を夏目漱石が書き、小川芋銭が絵を描いたものを取り上げ、一茶の句の解釈をしたのだが、これについて先生からコメントをいただいた。

「やれやれ木村さん厄介な世界に足を踏み入れてしまいましたね。小生の、人生のつまずきを考

えると、小林一茶と種田山頭火、そこに一休宗純とランボー&ジュネがくっ付いてしまったものだから、ほらご覧の通りです」これは5月23日のことでした。

* * *

我が師である白井啓治さんが亡くなられて10日ほどが過ぎた。先週はなんだか力も湧かず、またいろいろなことでも忙しい一週間であった。風の会の会報の編集からその印刷、またその間に仕事でまた銚子にも車を走らせ、東京には2日続けて行った。どうにか今週は少し気分的にはのんびり出来そうだ。自作本も在庫が少なくなってきた。まい、昨日から又少しづつ印刷・製本を始めた。

東京では大学時代の友人との懇親会もあり、10人ほどの気心の知れた友人の集まりであるこの会も15年ほど続いている。最初は年1回年末に集まったが、最近は暑気払いと称して2回の集まりが続いている。まだ現役のように仕事をしているものが半分ほどいる。多くが東京近辺に暮らしており、私は遠い方だが、それでもほとんど欠かさず出かけている。そして皆の変らぬ様子を見て、聞いて何だかほっとした気分になる。

茨城の地域興しの話になるとつい熱が入り自分の本を無理やり押し付け差し上げているがいやな顔もせずに受け取ってもらい、後でお礼のメールまで頂戴し、「木村さんの郷土愛に感動した」などといわれて一人悦に入っているのである。

何故、それまで文学や歴史などに何の興味も無く、ましてや造詣も深くない分野にのめり込んでしまったのだろうか。自分でも不思議である。

しかし、このような分野も理屈屋の理系人間である自分のような者にも意外とあっているのかもしれない。結構おくが深い。

我が労音史（10）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1979年の社会情勢と音楽状況

ベトナム軍がカンボジアのプノンペンを制圧してポルポト政権を追放。中国軍が北部ベトナムに侵攻し中越戦争が勃発したが、中国軍が敗退した。米国と中国の国交が樹立、中国は中ソ友好同盟条約の廃棄をソ連に通告した。ソ連では在外ソ連人スパイの釈放と交換に反体制派ギンズブルグら5人を釈放出国させる。ソ連首脳がS A L T 2に調印し、東西の緊張が大幅に緩和され、東欧・ソ連での人権闘争に拍車がかかる。ハバナで第6回非同盟諸国93ヶ国の首脳会議が開催。韓国では朴大統領が暗殺され全土に戒厳令が布かれた。アフガニスタンにソ連が介入してクーデターを起こす。国内では大平内閣が衆議院を解散し一般消費税の導入が見送られた。秋の総選挙で自民党が大幅に後退し過半数を割ったが、党一地方戦では大阪や東京の革新知事が敗北した。暮れの衆参両院で一般消費税反対が決議。

イラン革命の影響から第二次石油ショックが起り、原油の値上がりで省エネの声が高まる。

米証券取引委員会がグラマン社の海外不正支払いの資料を公開、日本関連で早期警戒機（CIC）の売込みに関し政府高官の介入を暗示。東京地検特捜部はグラマン疑惑で日商岩井の副社長を逮捕、秋にはCICの大規模な密輸事件が発覚し社長が辞任。米、ペンシルバニア州スリーマイル島の原子力発

電所で放射能漏れ事故が発生、日本でも高浜原子力発電所2号機に大量の冷却水漏れが発覚し、原子炉の運転を中止した。日本共産党が労働戦線の右翼的再編に対抗して、党大会で階級的ナショナルセンターづくりを決議。四が対日戦略基本文書で「日本人は兎小屋に毛の生えた家に住む」と指摘。外食産業が成長した年であった。「天中殺」の言葉が話題になり、国立大学初の共通第一次試験が実施され、「足きり」等の言葉が流行。

第1回日本の音楽展(熊谷弘構成)開催。松村楨三が第10回サントリー音楽賞、第27回尾高賞を受賞。林光のオペラ「べっかんこ鬼」(こんにやく座)初演、新響が「日本の交響作品展3・坂文雄」を上演。日フィル裁判で、東京地裁は職権和解案を提示したが不調に終わり裁判は続行した。東京都の芸術・文化助成の継続を求め関係11団体が運動を開始。秋、都議会の音楽議員連盟が33名で発足。芸団協が芸能人の生活実態調査を発表、収入は平均サラリーマン以下で、改めて文化水準の低さを示した。年末、鈴木都政は都民芸術フェスティバルの女性を大幅に後退させた。芸大奏楽堂の取り壊しに音楽関係者から反対運動が起きる。ユージン・オマンデイ(指揮者)が引退、ソロモン・ボルコフ編「シヨスタコヴィツチの証言」がニューヨークで出版。日本語ワードプロセッサ(ワープロ)が東芝で発売。パソコンは日本電気が発売。この年、原信子、巖本眞理、三遊亭圓生が逝去。

1979年の労音の動き

第27回総会は300人の代議員が労音会館に集まり開催された。運営委員会から提起された、ベトナム歌舞団とカンタータ「脱出」の総括が確

認される。3ヶ年計画(3000サークル3000人の会員)第2年度の方針「ベトナム民族楽団の取り組みを中心に4〜6月の第一次拡大月間と地域例会を中心とする9〜12月の第二次拡大月間」を設定。19サークル22名の代議員がサークル活動や例会作り、創作活動について熱く発言が、さらに演奏サークル(民研や労音オケ)、企画プロジェクトからの発言もあり運動の広がりが示された。来賓に木の実ナナや因幡晃が出席し例会への抱負が語られた。この総会では消費税導入への画策に反対する決議も採択された。記念演奏会には、フオーク歌手の神谷重徳や高橋忠史、沖縄女優の北島角子が個性的な演奏演技で盛り上がった。

前年のベトナム民族歌舞団に続いて招聘した、ベトナム民族楽団例会には6回6400人を組織し成功させた。これは多民族国家であるベトナム社会主義共和国の民族音楽創造と発展の計画から学んで、日本の民族音楽発展の糧とする目的で取り組まれたもので、内容は民族楽器と歌による伝統音楽・民謡でした。また、インドから招聘したベンガル民謡ブラマーチャリとそのグループ例会には加藤登紀子をゲストにし音楽界の注目を集め2回600名を組織した。ボリビアのチャラング奏者Eカブールを含め、民族音楽シリーズとして取り組んだ独創的企画は、各民族音楽の特徴・発展の過程を示し、名人芸的な優れた演奏で評価も高く、聴衆に深い感銘を与えた。

クラシック音楽界では、海外演奏家が増加し高額入場料で不況が続いている中、労音でもバリエーションハウスと第九以外は不調でした、これらは例会内容・曲目に魅力がなく、しかも一般では半年前から売り出すにも拘らず、労音では1ヶ月前からの申し込み等々早期からの宣伝と受付の改善が

必要です。ポピュラー音楽では人気のある歌手例会に人気が集まるが、多くは所属事務所による主催コンサートが多く、例会に取り上げられませんが。そんな中で労音30年企画の布施明例会は大きな成果を上げ、労音会館企画のふきのとうコンサート日替わりに5日間開催され注目を浴びた。そのたダウンタウンと鬼太鼓座のコラボは好評でその他地域の取り組みとして、佐藤光正・杉田二郎・大塚博堂・高石ともや等が成果を上げた。さらに、新しい取り組みとして例会づくりのプロジエクトチーム(ダウンタウン・布施明・佐藤光正・とんぼ・細坪基桂)生まれ創意ある活動が取り組まれた。

能・狂言・文楽などの日本の伝統舞台芸術は、前例会の1割に過ぎないが、八王子子の文楽例会や「ふきの会」の取り組みでは大きな成果を上げる。知名定男とりんけんバンドの取り組みに向け、沖縄に50名近くの代表団を組織し、学習と交流を深める。池袋にあるパモス青芸館との共同制作で、アイヌのトンコリ(五弦琴)・ゴツタン(箱三味線)の例会(小島美子||構成・解説)では、埋もれた日本の民族楽器の発掘と紹介普及の面で注目される。特筆される取り組みとして、黒柳徹子の企画・司会による「徹子の鬼オンステージ」(ゲスト淀川長治・久米宏・竹脇無我)は、ジャンルを問わず埋もれた芸能・演芸を寄席形式で紹介し、対談等で啓蒙的な中に楽しい例会として好評を博した。地域懇談会が18地域250名の参加で企画全般にわたり、討議され長期企画として「世界の民族音楽シリーズ」の方針が決まった。

例会外の活動として、冬のスキー友好祭は黒姫高原で関東労音の千葉と相模原との合同で開催(285名)、夏の友好祭は西湖紅葉台で356名が参

加。函館音感主催の労音大学には全国から800名（東京から30名）が参加し、今崎暁巳・小野光子・林光氏らの講演と活動交流がなされる。秋には大阪の全国会議に150名の活動家がバスで参加し、事前に播州労音との交流を深める。全国から13名がベトナム民族楽団の成功を期して代表を派遣（団長に東京から木下明男） 伝統芸能・民謡の継承についての経験交流を、更に労音から贈ったレコードカッティングマシンでレコードを作成する工場の見学。そしてベトナム社会主義共和国国会から、友好・交流の促進に寄与したことに感謝状が贈られる。日光で全国労音交流集会在開催され、1000名を超える活動家が結集（東京から230余名）サークル活動の強化が提起された。

労音運動30周年記念、第25回全国労音連絡会議が大阪で開催され、フェスティバルホールでの記念式典・記念演奏会に全国から3000人が結集。30周年のための祝典序曲（大栗裕作曲・大フィール・外山雄三指揮）バイオリン協奏曲（貴志康一作曲・辻久子）第九交響曲が初日に演奏、二日目は藤田敏夫構成・演出、司会藤本義一により「わらび座」（民族歌舞団）・ペギー葉山・菌田憲一・布施明・森山良子・西岡たかし・はしだのりひこ・杉田二郎等の出演者で賑わった。初日の夜には、いずみたく（作曲）・笠木透（フォーク歌手）木津川計（芸能評論家）茂山千之丞（狂言）氏らと公開座談会と交流会が開催された。

この年の共同企画は、世界の民族音楽シリーズでポポラーテベネト（第3回）ブラマーチャリ（第5回）ベトナム民族楽団（第5回）が全国各地労音で取り組まれた。ソ連との直接交流も復活、秋には「東ドイツ音楽の旅」が全国から200名の参加で実施される。1月に赤穂・11月に加

古川と沖縄に労音が建設される、会員数は13万1千人に。 つづく



父のこと（12）

菊地孝夫

菊地家の歴史を書く過程で、文献を読み漁るうちに明治初期のいわゆる「お雇い外国人」によって書かれた幾冊かの面白い本と出会った。

お雇い外国人と言えば、「耳なし芳一」で有名なのに日本に帰化した小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）もよく知られている。

そのひとり、若いアメリカ人女性教師・アンリの日記体の記録である。

黒船来航の大騒動からわずか二十年余り。今からちょうど百三十年余り前の生々しい東京の姿がそこに描かれている。

維新の混乱がようやくおさまりつつある頃の一外国人女性が見た、齒に衣着せぬ日本印象日記なのが面白い。女性の目から見た当時の東京の姿がいきいきと見えてくる。江戸から東京と名を変えたが、まだまだ前の時代のものが色濃く残っていてそれらにも興味津々だった。

大変なカルチャーショックを受け、欧米視察から戻った維新政府の要人たちは、「攘夷」などかたがり捨てて急ごしらえの西欧化を図った。

その一環として「華族女学校」（のちの学習院女子大）を作った。その英語教師としてアンリに白羽の矢を立てた。

アメリカ人神父の娘に生まれた彼女は、はじめ修道女を目指したがやがて教師をこころざし、貧しい黒人少女の為の学校づくりにその生涯をささげることになる。

たまたま本国にいたころ、津田梅子・幾松ら初の女子留学生の一人を世話することになり東洋の国に興味を持つようになる。

それから一〇年程して日本に渡ってくる。

彼女の目から見た日本の女学生たちの服装はお世辞にもいいとは言えなかった。靴も不恰好だと酷評している。日本髪を西洋風に結び上げ、鹿鳴館に集う当時の上流階級の夫人たちのドレスにも容赦なく手厳しい批判を加えている。彼女たちは昨日までは着物しか知らず、西洋音楽も知らず、ましてや男女が手を取り合って行うダンスなど全く知らなかったのだから無理もないのだけれど。少女らの英語の発音はひどいものだと書いている。日本酒も「まずい」の一言。西洋料理も食えたものじゃないと書いている。

小泉八雲は西欧化を痛烈にこき下ろしている。

当時の笑い話が残っている。

若い書生が、酔った勢いで芸妓の前で覚えてたての英語を披露する。

「僕は秀才だから、あと数か月すれば、英語の大家と呼ばれるようになるのは間違いないんだ」「それじゃあ、あちきらの名前を英語でなんと

どうか教えてみてくんまし」

「お安い御用だ」

「お竹は？」

「バンブーだ」

「それなら、お梅は？」

「プラムだ」

「お鳥は？」

「バードさ」

よどみなく答えて。どうだと言わんばかり。

すると別の若い芸者が、

「美佐吉は？」

「・・・」うつむいて考え込んでしまう。

「お茶羅は？」

「・・・」ますます苦しくなって、あぶら汗を流しはじめた。

「今辞書を持っていないので、近いうちにノートをもってきて、君たちに答えよう」

この話は当時絶大な人気を博した文人・成島柳北が漢文で書いたものである。ベストセラーとなつた「柳橋新誌」の中の一文である。

幕臣で一時は騎兵奉行と言う要職にあつた柳北は、成り上がりのにわか書生たちの無粋さに腹を立て嘲笑したのである。

いつの世も変革期にはこうした笑い話が生まれる。敗戦によつて一夜にして昨日までの価値観がひっくり返ってしまった、昭和二〇年八月の頃と二重写しになる。

GHQの力を恐れた文部省は各県に通達を出し教師らは大慌てで教科書を墨で塗りつぶすよう生徒らに指示した。巷には、にわか横文字が氾濫した。「叩き殺せ、ニミッツ・マッカーサー」と唱えていた連中が、コロツと手のひらを返し、「占領軍」を、「進駐軍」と言い換え、ありがたや民主主義

の伝道者、とばかりに揉み手してGHQに日参した。さつきまでは「鬼畜米英」だったはずだが解放軍として大歓迎である。

基地の周りには米兵相手のラブレターの代筆屋が林立し大繁盛した。

女の子たちは背の高い米兵の腕にぶら下がり、しみつたれた日本の若者をしり目に大通りを闊歩した。水商売の女たちは、洋モクを啜え「オンリー」と呼ばれる外人専用の娼婦となつた。

米兵による犯罪も多発したが、新聞はやむなく「色の黒い大男」とか「色の白い大男」とか書くしかなかった。

注記：「柳橋新誌」の文は原文をアレンジした。

白井先生からの贈り物 兼平智恵子

みどり咲き誇る風待月に旅立ってしまった。生き字引の人、不老不死の人と確信してましたからこの世から消えるはずがない完治をお待ちしてました。

いつものちよつとお洒落な装いで、いつもの席からどんな問いにも辛口節で返答が飛んでくる………

先生との出会いは平成十三年の秋、石岡市歴史ボランティア養成講座でお見かけたのが最初でした。先生は石岡人にしてはおよそ場違いの雰囲気

を放っていた。その当時、私は「下手でいい、下手がいい」のキヤチフレーズの絵てがみを楽しんでいました。「歴史の里いしおか」とうたわわれているながら石岡市民の皆さんが石岡の歴史を余りご存知ない事に疑問

を持ち、絵てがみ展示会には歴史に関する作品を出品していました。そこで目を留めて頂いた方の紹介で再びお会いする事になりました。

東京では脚本家、そして映画監督として活躍していた先生は残りの人生を奥様のご実家、石岡の地に來られて間もない頃でした。

歴史の町石岡に來て最初に耳にした言葉が、歴史では飯が食えん、でしたと。歴史というのは生活する事によつて文化として紡がれていくもので歴史では食えんというのはじつにおかしな理屈で、歴史を紡ぐ事を忘れて歴史では飯が食えんとは何事かと立腹されていた。

そして間もなくして平成十六年六月、先生のふるさとルネサンス塾開講。

「画家であれ、俳優であれ全て作文が基本であり、作文力のない者には達成が難しい」

「今日の嬉しかった事、楽しかった事の幸せを拾つて言葉におとしなさい」

講座終了後平成十八年六月、ふるさとルネサンスの会報（現在のふるさと風）に半ば強制的に参加する事になる。

「表現する文章に、上手下手などと言つた尺度はない、あるのは思いの丈」

「批評頂くことには感謝、無視される事が最悪である」

「懸命に書いていけば、懸命に受け止めてくれる人がいるはず」

こうした励ましの言の葉を頂きながら、毎回締め切りオーバーの提出を受け入れて下さりお蔭様で十四年目に入りました。

そして先生は手話を舞にして朗読と共に表現する「朗読舞」を考案され、聾啞女優、小林幸枝さんを発掘し、朗読舞踊団「ことば座」を立ち上げ

られました。その舞台の背景画を担当させて頂く事になりました。

顔型にした和紙に五百羅漢の顔、顔をしめて五百七十枚余り。

先生の朗読と幸枝さんの舞と台本から描き出した楮紙全紙三十枚余り。

市内の神社仏閣や文化財等を半紙に六十枚(現地でのスケッチをもとに)。全て墨、筆、顔彩で仕上げると言う若さを武器にして、貴重な体験をさせて頂きました。

今は、先生からの贈り物として手元に残され出番を待っているかのようです。

この贈り物をこれから如何に生かせるか、しつかりせいと、天からの辛口節が飛んでくるかのように。今となりましては多くの豊かな経験をさせて頂いた感謝の気持ちも届かず心が痛みます。先生、有難うございました。

病魔との闘い本当に、本当にお疲れ様でございました。どうぞごゆっくりとお休み下さい。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

○ 天に向かい問う 答えかえらず

智恵子



いただいたメモ帳

伊東弓子

里山の緑に 白鷺よ何処へ

昨年暮、先生に戴いた一冊のメモ帳を、今手にしている。薄い鼠色のテープで上を綴じてある。薄桃色の表紙には、「風に吹かれて」ひろぢ(印)と、書かれている。

「伊藤さん一行文を作ってみな」と言っただけのものだ。開いてみると、

一月には、毎日一句づつ綴ってある。三月には、五句作ってある。

七月には、先生とお別れした後、二句書かれてある。二月、四月、五月、六月は一句もなく、空白の多いままになっている。

先生との出会いの頃を振り返ってみよう。古民家で行われた朗読会だった。夕暗の帷が下りて、江戸時代の庄屋の家は現代人の集いの場となった。二、三百年前も何かあると村人達が集まっていたのか、遠い昔のを感じながら加わっていた。私はこういう雰囲気が好きだった。話しの内容は覚えていないし、朗読した人の顔も名も記憶にないが、その中で中心的存在の先生の顔は、揺れ動く灯の中に確り覚えている。合併寸前の良き玉里村の時代だ。

以前から参加していた「玉里の史蹟と自然を護る会」の草取りと日が重なり、早めに「玉の井」や「亀井」に出かけ草取りをし、石岡に向かってペダルを踏んだ。足、腰も丈夫だった六十代始め、「ふるさとルネッサンス」の会へ旧久松商店を目標にした。楽しかった。

Nさんのパソコン教室、鹿島鉄道廃線直前の足掻

きともいえる種々の活動、Nさんのお母さんも東京仕立の美味しいコーヒーコーナーで張り切っていた。Kさんの絵手紙教室の人達の情報も入っていた。石岡の歴史に纏わる描きの表現で腕を奮っていた。Uさんは何か文章を綴っているらしい。先生に戻されたとぼやいている姿があった。私は演劇風のことをしたいという気持はあったが、言い出す勇氣もなく戸惑っていると「一行文を作ってみるといい。あれこれ考えず、型に嵌め込まず、素直に言葉で言ってみるといい」と、先生が背中を押して下さった。二階では手話のグループの人達が多勢集まる日があつて賑やかだ。左隣りは米屋、右隣りは下駄屋、大正時代のレンガ造りの街並みを生かしての町興しの一環でもあるという。

“ふるさとルネッサンス”と銘打って、機関紙発行が始まった。戸惑いながらいる中にととうとう文章は纏まらず、記念すべき一号には一行文を幾つか載せての出発となった。先生は「上手い、下手はない。思いを書く、表わすことだから」と励まして下さったが、その意味はよく解らなかつた。伊藤さんと僕との違いは、強いて言えば読んだ本の数が違うことだね。と言っただけだ。このことはよく解った。急に実行しても間に合わないだろうと、諦め気分の私に「毎日一ページを読み続けてみなさい」と優しい助言を下された。加えて”戦後の教育の中で作文というものが、子供の自由な表現を可笑しくしてしまった。何か経験はなかつたかな”と、尋ねて下さったが、咄嗟には答えられずその俣になってしまった。心当たりもなかったが、先生のライフワーク「手話舞」にKさんが加わり、その中Sさん、Kさん、Kさんそして一年前Kさんが入られ活力にあふれる会と

なった。皆さん高度な話をしているようで、話に入る事が出来ず聞く一方で過ぎたことが、どの位続いたことか。報告のような事は少しづつ出来るようになっていった。話しやすい人との会話が進められるようになってきたり、成長は本当に少しづつだったようだ。みんなの前で先生から言葉を頂くのは、顔から火が出るようで恥ずかしかったが、一つ一つを越えられたのも私の頑張りだと、自画自賛したい。ここ三〜四年は話しの輪に入れるようになった。

玉里御留川を歩く会の立ち上げ、小川の古文書勉強会へ仲間入りしたことで忙しさは一層増した。その結果毎月毎月がメ切に間に合わすこともなく、「続ける」という言葉に甘えて、先生への迷惑もKさんへの迷惑も深く考えず疎かにして書いていたに過ぎない。無駄が多く言葉や文章が整理も進まないままだった。御留川のこと、古文書のこと、理解して下さっていたと甘えて唯、唯、「続ける」ことで気持ちを紛らしていた。先生は雑な文も、期限の遅れも、誤字、脱字のことも指摘されなかった。申し訳ないと思っただけで、先生にはもう届かないでしょうね。

ドラマを通してこの頃少し学んだ事がある。私は韓国の長編ドラマが大好きだ。ドラマを通しての会話の中味の深さ、断片的な映像から纏まっていく物語り、面白、可笑しく見ているだけでなく、自分の綴る表現に生かしていくようにしよう。

心配をおかけしてばかりでしたね。今回の物は如何ですか。先生！一向に上達していませんか。少しは成長していますか。暮れに戴いたメモ帳に印した一行文を、一度も先生にお届けすることもなくお別れしてしまい、申し訳なく思っています。

入院中にお届けし見て戴ければ何か助言していただけたでしょうに。「伊藤さんの一行文はとても良いものがあるね」と、言っただけのことには、お答えすることもなく、お詫びするばかりです。

最後のお別れの時の、少年のような純粋なお顔、その時、聞こえた声は「一行文待つてたよ」でした。平成三十一年一月元旦 メモ帳に最初に綴った一行文は、

新春 今年はどうな“風”が吹く

だった。

ありがとう

小林幸枝

尊敬する白井啓二先生は、療病のあと、回復することなく旅立ちました。奇跡を信じていたのですが、残念です。また危篤時に、奇跡を信じ、病院に見舞いに行こうとしましたが間に合いませんでした。大変残念で後悔しています。心よりご冥福をお祈りいたします。

十三年前、白井先生と出会い、NHK放送局のギャラリーで歴史の里「いしおか」としてテレビ局で手話を表現しました。

また、つくば市の劇場「カピオ」で、「石岡物語」を公演しました。

ギター文化館元館長の木下明男さんに出会い、ギター文化館を発信基地として「常世の国の恋物語百」に挑戦することとなり、そのプレ公演を行いました。

白井先生との初対面時、先生の印象は怖く、厳

しそうなイメージでした。当然、映画監督や脚本家などの経歴をされてこられた方であり、厳しい方だと思っていました。しかし、段々に理解をしていただき、やさしい笑顔が増えてきました。

私は、甘え面、なまけ時がありました。白井先生に迷惑をかけないようにもつと自分を磨いてプロのように頑張っていたらと思っていました。まだ学ぶ事がいっぱいあり、まだ足りないと感じていました。

白井先生も、まだやりたい事があるはず！でも逝ってしまったわれ、残念でたまりません。

恋物語百に挑戦すると約束したのに、まだあと六十二語・・・。

悲しくなってきましたので、これ以上書けなくなりしました。また次号に書きたいと思えます。

ありがとう!! 安らかなご永眠をお祈りいたします。

● 大切に大切に想ほて今夜も一人



白井先生に寄せて

風のごとば絵同好会 甲 信子

永訣

菊地孝夫

別離

打田昇三

癌の告知を受けて尚、病魔と闘いながらも、ペンをとり自らの病状を刻々と綴り、会報を後世に残してくれた事どんなにかお辛かった事でしょうか。想像すらできません。

ところが、白井先生は上顎洞癌と診断された時、死への執着の感覚は全くなく肉体的苦痛だけは勘弁願いたいと死への恐怖はなかったと綴っておられます。むしろ未知への領域への恐怖よりも未体験ゾーンへの物見遊山の好奇心の方が強いと樂觀的に捉えられ治療に積極的に取り組まれたご様子でした。どうしたらそんなに超人的な前向きのお考えになれるのか只々脱帽でした。告知からのあまりの速さでこのような事態になるとは・・・先生も治る事を信じておられただけに無念だけにちがいません。

亡くなられたことが現実となつてしまった現在、受け入れ難いご家族の心痛を思う時、この世の無情さに胸が痛みます。お元気で朗読劇を読まれた頃のお姿が臉にやきついておられます。

今は只、鎮痛薬も効かない程の痛みから解放されて、ゆつくりと安らかに天に召されますようにと祈るばかりです。ご冥福をお祈り申し上げます。

毎年8月は6日・9日の広島・長崎の原爆投下に始まり15日の終戦記念日で終わる恒例の行事がある。仏教ではお盆とされる。祖先や家族の死を悼み、或いは魂がはるか遠い冥土からいつとき帰ってくるかとされている。

何年か前までは墓を掃除に行ったり線香をあげに行ったりした。南天の木がやたらに繁殖力が強くて、伐つても伐つても生い茂る。このところ面倒になってときおり草むしりに行ったりするだけになった。私の代で絶えることになる。別にこれはどうでもいいこと。長兄が死んだ時点で菊地家は終わったと思っているから。

父は私たちに向かってしばしば、死んだら海に散骨してくれと言っていた。かつての戦友たちの多くが太平洋深くに眠っている。

幼心にも父の思いは伝わった。父は墓参りに一度も行っていない。仏壇に線香をあげる姿も見ることがない。

過酷な戦場で生き残った者は、死者の靈魂の存在など信じなくなるのが当然かもしれない。勿論、靖国神社に足を向けたこともない。

死者は胸の中だけにあれば十分であり、その思いは自分の消滅とともに失われてゆくのが自然なことだと思っている。

あるほどの菊投げ入れよ棺の中

漱石

「狭井河よ。雲立ちわたり畝傍山。木の葉さやぎぬ風吹かんとす。畝傍山、昼は雲とぬ、夕されば風吹かんとす。木の葉さやげる…」という気象庁が作り損なつたような古歌がある。格別に知られた歌では無いが、此の歌は我が国の歴史、特に天皇家の系統に関して重要な意義を持つ。

神話なので「根拠」と言われると返事に窮するけれども神様でも喧嘩はするらしく、大日本帝国の初代天皇とされる神倭伊波禮毘古命（かむやまといわれびこのみこと＝神武天皇）の死後に其の相続を巡り親族間の内輪揉めがあった。其の経緯を示す唯一の証拠となる物語の中の歌であるから善良忠実な日本国民としては、嘘と知りつつ信用するしか無い歌である。

古来、人間の業として、組織のトップが倒れると規模の大小に関わらず何かしら混乱が起きるものであり、悪くすれば其れが対立抗争に発展するから組織全体の活動が鈍ることになるのだが我が「ふるさと“風”の会」は会の創始者であり其の大黒柱であつた脚本家・白井啓治先生を失つても残された会員の皆さんが創設者の意志を継承し、盤石の体制で運動を継続することになった。是は自画自賛に値する素晴らしい事であると思う。

顧みれば平成十六年に誰が言い出したのか「石岡市商店街を活性化しよう！」という無駄な運動が起こり、其のビジネスモデルとして仲町の久松商店を拠点とする「ふるさとルネサンスによるまちづくり」が提唱された。其の頃の私は、定年後に再就職した職場も定年になったのだが経営形態が替わるので残留を勧められて一年間は「お礼奉公」

《師への哀悼・・・FBより》

で働き、後は断わって地元の女性教職員OBの方々が主で始めた読書会に参加していた。其の関わりで開催された石岡市文化祭を担当することになり或る日、会場で「頼まれて見学に来た：」と言う白井先生にお会いしたのである。

会話の中で「脚本家…」と知ったので、私は其のことを関係者に伝えたところ其れが拡大して、当時（現在でもそうだが）、叫ばれていた「石岡市商店街活性化」事業の為に白井先生に助言と協力を頂くこととなり、平成十六年六月に「ふるさとルネサンス民話塾」が開講されたのであり、其のことが当時の茨城新聞などで報じられた

表現は悪いが私は火付け役なので其処から逃亡する訳にもゆかず、現在も活躍中の兼平智恵子さん、小林幸枝さん、少し遅れて参加した伊藤由美子さんら六、七名で白井塾の生徒になったのであるが教育内容が厳しく、最後まで頑張つて卒業したのは此処に名前を挙げた方々だけである。

平成十七年六月には白井先生から示唆されて「ふるさとルネサンスの会会報・第一号」を出し、第三号からは「ふるさとルネサンス」に改題、大きさもA四判にした。「ふるさと風」としたのは第十一号（二〇〇七年四月）からである。以来、順風満帆と言いたいが、途中から拠点となる場所を失った。是で解散するところ、当時のギター館長・木下さんに助けられたり、菅原さんが加入されたりで、間借り生活ながら何とか立ち直つた。

そして「天祐」とも言うべき、白井先生と木村さんの遭遇で「風の会」は新たな拠点を得て順風満帆の航海を始めたところで白井先生を失った。不肖の身は無駄に嘆くのみだが是からは木村さん頼りで白井先生のご遺志を継承してゆくしか手段が無い。伏してご慈悲を懇願する次第である。

しおみ えりこ

フェイスブックは過去の思い出として、こうして時々昔の写真がアップされて来る。つい先日、我が師匠 白井啓治氏が癌のため逝ってしまった。今年お正月に癌が発覚。まだまだやりたいこと、やらねばならないことがあつて無念だつたと思う。長旅に出るので、突然ではあつたけど、会いに行つた。行つて良かった。この写真にはもう1人、大切な友人がいる。彼も癌で逝つてしまった。宮川賢左右衛門氏。彼も京都に移住して、Jalpaと行き来しながら一緒にアートシーンを作つていこうと話し合つていた。そんな矢先のことだつた。今、2人に1人が癌になると言われている。どちらにせよ、動けるうちに動こう。合掌。

熊谷 敬子

語りの師匠白井先生の訃報をFacebook上で知る。

石岡市風の会ことば座主宰で手話舞の女優小林幸枝さんの産み親、脚本家、詩人、そして朗読の師匠。

Facebookで知る事自体、私のこの不甲斐な日々足りない数、数えるばかりで、

一つ一つをまたこぼしている。
積み上げねばと焦る側で、白井先生の軽く流しストンと定まることばが立つ。

演劇とは、はげしく。

間を演じれと。

奇しくも、今月中旬、花さき山を久しぶりにやることになっている。

お弔いに、やれというシナリオですか？

白井先生のご冥福を祈ります。

【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らし (30)

さと女

先月末幸枝ちゃんから一本のメールが、白井先生が亡くなった。危篤は聞いていたが・・・まさか？まさか？最近、遠くから（昭和世代の歌手や俳優）近くから（古くからの友人、今お話ししていた友人）親戚等身近な人・・・等々、悲しい訃報が多く、哀しいことこの上がありません！

●白井先生への思い・・・

・70歳になった時、先生は「人生70年古来、稀なり」と言い「人間にとつて健康・健全でいられるのは55歳まで、あとは余分をもらっているようなものだ。だから、これからは何年の余分が得られるか分からないが、1年1年をいや、1日1日を大事にとつて愉快に過ごさなければ罰が当たると言うものだ。」と、呟いていた。ここ数日、いろいろなことを思い、何事にも意欲がわかずグズグズしていたが、これでは供養にならない。何か愉快だったことを思い出すことにした。先生は石岡の地で常世の国の100の恋物語を語ると頑張っていた。その物語を生み出すとき、その地を実際に歩き物語を創っていた。ある日龍神山を

テーマにした恋物語を書いたため5〜6人で荒れていて石だらけの道もないような龍神山に登った。頂上から下を見ると、削られて2つに分かれてしまった山の間には、素晴らしいコバルトブルーの湖が見えた時には、みんなで思わず声をあげてしまった。また先生の書き下ろした物語が東京の大舞台で公演したとき、わくわくしながら観に行った事などたくさん愉快を思い出した。たくさん愉快を残してくれたのだから、残してくれたたくさんのお物を大事にして、私もたくさん愉快の中で過ごしていきたいと思った・・・。

・白井先生が亡くなり、お別れ会がひらかれた・・・昨年暮れ歯肉の違和感に気づき、病名が確定し治療が始まったのが、今年の2月から。辛い治療に耐え、復帰出来ることを信じていたのに、突然の訃報の知らせ。そして今日告別式。あまりに悲しすぎ、涙、涙のお別れ会。カーネーションの献花をしながらありがとうと、みんな口々に呟いていた、外は涙雨だった・・・。

●我が家のこと色々・・・

・朝早くから庭掃除、夫も伸び切った畑の草刈り。少しずつ4日がかりで一週り終わったが、この季節、2週間もすると見事に再生、しばらくはこの繰り返しです。私の方は増え過ぎた草花の抜き取り作業、もったいないなんて言っていられませんが、どんどん増えるものもあります。その1つホタルブクロ。花の中を蜂が入りしていましたが、ごめんなさいと言いながら、少しだけ残し思い切って抜き取る。

・青いちょうちんのような実？が付いている。お盆のころには朱色に色づく、この植物も生育がとて旺盛で地下茎が伸びて、どんどん増えてい

く、こちらもごめんなさいと言いながら大部分処分した。

・葉の半分白くなり、まるで花が咲いたような半夏生。カタシログサともいうらしい。夏至の頃白くなり、小雨が良く似合う、この植物も旺盛な繁殖力でどんどん増える。

・年を取ってから朝寝坊に・・・外につれだそうと、後ろ足がもつれ歩けなくなった。涼しい所まで抱えてくると、今度はけたたましい声で泣く。朝の排尿もせず、心配になり病院に連れていく。病院についても苦しそうな泣き方。診察後検査をし、管で尿を出し、点滴とかで夕方まで預かりましょう、と言われ夕方迎えに行く。どうも脱水状態だったようだ。200ccの点滴と2本の注射でだいぶ回復したようだ。暑いときはエアコンで調節してあげてください。高齢なので言われた・・・。

・とんでもないところに、キノコの花がさいた。とにかく大きく肉厚。毎日大きくなっている？ラジオ深夜放送からの、今日の花言葉で目が覚めた。今日の花はノカンゾウ、苦しみからの解放だとか？我が家にもたくさん黄色い花が・・・。

●女3人旅・・・

・桐生のオルゴール館「とおりやんせ」に出かけました。ローカル線の旅もいいね・・・ということで電車旅。桐生に着いてからZちゃんの調べた、古民家のお食事処「芭蕉」へ、かつて文芸家や民芸家の著明人が足を運んだという古民家。なんとも不思議な空間で昼食をとり、矢部さん（八郷の人形作家）が参加のオルゴール展へ。店主さんから様々なオルゴールを聴かせて貰う。その音色に、まるでコンサートを聴いているようだねと、みんなでうっとり。あつという間に帰る時間にな

り、帰りは矢部さんに甘えて車に便乗させてもらった。途中道の駅に寄り、やがて筑波山が見え樂しかった桐生への旅も終わり、薄暗くなったところZ宅に着いた。Nちゃん、あー車、岩瀬駅だっけ。その後はどうしたか？こうして楽しい珍道中は終わった・・・。

・先日のオルゴール館の余韻がまだ残っている、店主さんに見せていただき、また、音を出していただいた数々のオルゴール、どれも素晴らしい物ばかりだった。一緒に行ったYさんからお姉さんのオルゴール引つ張り出し埃を拭って聞いてみたとメールが来たので、家にも確かあったなと思いだし探してみた。可愛い人形のは30年以上入院中の友人へのお見舞いに買った物だが病室ではかけられないので、退院したら渡そうと思いつち帰ったが、そのまま帰らぬ人となってしまい、手元に残ったものです。ピアノ型のは職場の何かのご褒美で頂いたものです。久々にねじを回し、当手を振り返りました・・・。

●コンサート

・9月末から10月にかけて25年ぶりに茨城県で行われる国体を、文化の力で盛り上げようと中央公民館でコンサートが開催されました。歌の力で故郷を盛り上げようと頑張っている山本恵莉子さんを中心にフラダンス、日本舞踊、子供たちのサンバと。会場は大変盛り上がりました。そして夜はひつじの郷でのジャズコンサート、クラリネットとピアノでした。ヒツジ肉を食べた後は薄暗くなっていく山の中で聴く音色、昨日はとても素敵な一日でした・・・。

・オカリナ奏者ホンヤミカコさんとギター竹内永和さんのコンサートに行つて来ました。大分か

ら上京する友人と小田原、東京の昔の音楽繋がり
の仲間と久しぶりの再会。お二人の演奏、心から染
しみました。また、お寺の本堂での演奏の素敵
な響き、そして、目の前での演奏、大変贅沢なひと
ときでした。友人は涙が出たと言っていました。
お二人は今後南米ツアー韓国、台湾のフェスティ
バルでの演奏とますますご活躍のようです。また
の機会楽しみにしています。

・横須賀で義兄の法事を済ませ横浜へ。吉川さ
ん野口さんのコンサートに10分程の遅れで到着。
会場には星野尚さんの木工象嵌の絵画も展示され
また久しぶりの方にも何名かお会いした。そして
思いがけずFacebook友だちである磯部さんにも
お会いできた。演奏はもちろん感動。人との出会
いにも感動でした・・・

●色々・・・

・エコクラフトで箱型から次の段階へ、6つ目
編みの籠づくり、野菜の収穫に使うということ
で・・・出来ない、出来ないと言いながら悪銭苦
戦、果たして来週のお楽しみです。

・歴史散策、園部公民館主催の年1度のバスツ
アー。今年は足利学校。足利フラワーパーク、佐
野厄除け大師でした。昨年は川越街中散歩。来年
は日光とか希望が出ていました。フラワーパーク
はバラ、ユリ、クレマチス、アジサイまだまだ見
ごろでした・・・

・梅雨前線はどうなっているのだろう。今日も
低い雲に遮られ、時折雨が降る。そんな鬱陶しい
天気の中、カフェオリーブさんに集合、初めての
方を含め6人であれやこれや、口、と手が動く。
皆それぞれの物を作り、ほめ合ったり教え合っ
たり、そういうしていると、楽市さんのお2人さん、

遅いランチに現れた。一層賑やかなひと時になっ
た・・・

・竹で編んだコーヒードリッパー・・・長野の
方で作っている方がテレビで紹介されてから、
じわじわと人気が出てきたらしい。6月福島での
工人祭りで師匠の作った竹のコーヒードリッパ
ーも人気だったらしい。数個しか持って行かなか
ったので、何人もの方から予約を頂いたこと。
我が家でも遊びに来た姪にお土産にあげたら、も
う一つ欲しいとの事。どうも会社で使ったら、
そういうわけで今日はドリッパーを作った。これ
は形を作るのが難しく、それよりも真竹1本の長
さのひごを作るのが大変。この長さのひごは造っ
たことがないので課題を与えられてしまった

●東京から・・・

・久しぶりに東京から友人夫妻がやってきた。
八郷に初めて来たときから教えて18年・・・老犬
コロちゃん我が家の周りをうろうろしている頃
だった。夕べはひまわりの館でお風呂に入り、近
所の店、池之端(きみまわりの店)でキノコうど
んを食べた。イワシ、カツオの煮つけ、ラッキョ
ウの味噌漬けで、生ビールをのみ、賑やかな「き
みちゃん」を交え楽しい時間を過ごした。さて、
明日はどう過ごすのかな？キノコうどんのつけ汁
のなかには10種類もの天然キノコが入っている
との事・・・

・八郷散策2日目、今日は下青柳から弓弦方面
へ行くことに・・・ブックカフェ「えんじゅ」(あ
いにく休みだった)方面の山間をドライブ、そし
て朝日里山から弓弦へ、古民家のイタリアパン工
房パネッサでパン購入。里山をゆっくりドライブ
しながらフラワーパーク内のレストラントレタへ、

ランチをゆっくりいただいていると早くも11時。
直売所で野菜を買い、最後に「竹細工師匠の工房
」で一休み。材料採りに山に行く話など聞きなが
ら作品など見せてもらった。そういうしている間
に大田区まで帰る時間に。次回は秋の味覚の頃を
約束して帰っていった・・・。レストラントレタ
では座ったテーブルの前の壁には、優しくほのぼ
のとした、小田島さんの絵が飾ってあった・・・。

《風の眩き 》

国境の壁

打田昇三

アメリカの大統領がメキシコとの国境に壁を設
けて不法移民の流入を阻止する...というニュース
があった。メキシコとアメリカの国境は何千キロ
もあるから、其処に壁を築くとなれば莫大な予算
が必要になるが、国境の大部分は峻険な山岳地で
其れに沿って大河リオ・グランデが流れているか
ら壁の設定も東部に限定されると思う。それで
も膨大な経費を必要とする筈である。

多分、壁が設けられるとすれば西部劇の時代
からガンマンたちが往来していた地域であり、其
の場所はアメリカ側が「エル・パソ」、メキシコ側
が「フワレス」と言う都市である。エルパソは「エ
ル・パソデイラ・ノーチエ(北方への出口)」の略
で、西部劇にも頻りに登場している。

私は現役時代に日本国内では出来ない地対空
ミサイルの実射訓練に参加させて貰う機会を得て、
(初めて割り当てられた貴重な枠だが当時の部長
が関係部隊出身の方だったので簡単に、私が選ば

れたのである)米国テキサス州の砂漠地帯に在る茨城県と同じ面積という米軍の射撃場に行った。宿泊は荒野の中に仮設された兵舎だが、それでも冷暖房が完備し一般隊員の食堂でも卵料理などは個人の希望を聞いてから料理してくれる。民主主義義祥国の軍隊は階級に関わらず人間らしいサービスが受けられたのには感心する。

宿舎の外は猛毒を持つガラガラ蛇や野生の鹿・馬などが出没する半砂漠地帯であり日本の自然と違つて油断は出来ない。私が居た時にも宿舎近辺で毒蛇に噛まれた者が日本に緊急輸送をされた。米国は毒蛇と協定しているのか?医療費が高いらしい。其の時の私の任務は「ミサイル発射現場に担当者以外は(偉い人でも)近づかせない」ことだったが、毒蛇などは止めようが無い。

「毒蛇事件」は有ったが私は無事に任務を果たしてエル・パソの米国陸軍基地に戻った。市街地に隣接する基地の面積が土浦市と同じだと聞いて先ず驚く。其の頃の日本には未だスーパーマーケットなど無かったが基地内には其れが幾つもあり、沖繩辺りで米軍兵士と結ばれたらしい多くの日本人女性が働いて居た。市内から基地までは民間のバスが運行されていたが、男女同権の国らしく多くは女性のドライバーである。日本のバスと違い座席は固い木製だが、道路が完全舗装なので木の椅子でも特に苦痛や不満は感じない。

帰国も民間機利用だが時差ボケ解消を兼ねて自由時間が与えられたので、数人の同僚と徒歩で国境を越え(リオ・グランデ河の橋を渡り)メキシコ領のフワレス市に行ってみた。怪しい飲み屋や土産物店が軒を並べるだけに見えるべきものは無いがメキシコでは大都市になる。現在は改善されているとは思いますが、先ず感じたのは道路が粗末なこ

とである。行きは徒歩だったが帰りはタクシーを利用するとして、客待ちの車に数人で乗ったのが発車前に扉が外れて私は転落しそうになった。其の米国出張から十数年後に、私は年末年始の休みを利用して懐かしいメキシコを訪れることにした。マヤ・アステカ文明の地を巡る旅である。現地に着いてフワレス市のボロタクシーを思い出していたところ、今度はメキシコ航空に出稼ぎから帰国する現地人の大荷物優先で、トランクを遠方に回送されてしまい、着換え無しで何日もジャングル地帯を放浪する羽目になってしまった。国境に壁を築くトランプさんの気持ちが分かる。

雑談オンパレード

菅原茂美

◎借金王国日本

なぜに国は、世界一の借金17年度末現在、1.071兆円もの負債を造ってしまったのか。払える見込みはあるのか?何時誰が、どうやって支払うのか、国民に明確に説明してから決議しろと言いたい。隠し財産もあるとは言いが隠し借金だつてもものすごくあるという。海外援助の「円借款」など返つてくる当てがあるのか。

現在中国は、アフリカなど後進国に猛烈な「元借款」を供与している。大変後進国を援助しているように見えるが、実はそうではない。借金が払えなければ、港湾とか空港などインフラを、将来巻き上げるのが狙いのようだ。そうやって「一路」を築きあげている。目の前にニンジンをおぶら下げて馬を走らせ、走りきれないなら、殺して食べる。

昔、先進国がやった奥の手を悉く真似をし、後進国の焦りか、やツてる事が見え見えの汚らしさ。世界が力を合わせ、正常に戻す努力を強制しなければ、恐るべき未来が展開すると思われる。北極海の領有権主張・月の裏側の開発・他国の人工衛星攻撃・外国の知的財産の略取・サイバー攻撃などやりたい放題。日本に照準を合わせた核弾頭が、いくつも配配置みだといわれる。真に困った隣人だ。

さて日本は、支払い能力があるならば、ある限界内で借金もやむを得ない。但し支払いを決して次世代に順送りしてはいけない。親父は子どもや孫に借金を残してはいけない。山林など財産はあつても、それは子や孫にも使う権利があるのだから、親父の代で使い果たしてよいものではない。代議士は巨大借金を決議したのであれば、代議士自身の懐で支払う覚悟がなければ、安易に借金を決議してはいけない。国民は代議士の行動をしつかり監視しなければならぬ。政権党が決めたので俺個人が攻められる理由はないとする言い逃れは決して見逃してはいけない。私個人について言えば、がんを4つもやっている状況からして家族にも心配が皆無ではなからう。何度も借金と、隠し子は絶対ないと断言してきた。それにしても

「無い」ことの証明は、借りたという証明以外に証拠にはならない。信頼以外に方法はなからう。

◎なめこ汁の恩恵

4度目の癌でしみじみ苦しんだのは、喉頭周囲の激痛であった。がん性疼痛である。唾を飲み込むのさえ激痛であった。ところがあるとき、ナメコの味噌汁と一緒に御飯などを呑み込めば、痛さを半減できることを発見した。これを主治医に話

したところ手を打って喜んでくれた。病院のノウハウにこのメニュウはなかったらしい。一つの改革に貢献できた。そもそもナメコはなぜあんなに矮小で収穫するのか。せいぜい直径1cmだろう。成熟した直径1.5cmぐらいのも、とてもおいしい事をご存知か。私の兄は昔、奥羽山脈で友人と、クマと闘いながら、よく巨大なナメコを獲ってきただもんだ。そして酢飯に漬けておいてしばらく楽しめる。山での収穫は3メートルぐらいの棒の先に鎌を結わえて数メートルの高さの所の立ち木から立派なナメコをかきむしって、獲ってくる。半日で背負い駕籠一杯(10kg)獲れる。騙されたと思って新鮮で大きなナメコを一度食べてみてください。小さな人工栽培は、何かちよつとおかしいと感じるはず。

◎人類はおかしな雑食動物

人類は肉食か草食か？ それとも雑食かと問われたら、間違いなく雑食である。それは「歯」が証明している。門歯と犬歯は明らかに肉食。門歯と臼歯は明らかに草食。門歯は両者に共通。そして、腸の長さは日本人などかなり歴史的に草食に近いので、草食動物に近いほど長めである。ヨーロッパ白人は、かなり肉食に近いので、腸はかなり短い。しかし、完全な草食はありえない。なぜなら、草食だけなら必須アミノ酸が欠けては、生きていけないからだ。予想どおり、動物蛋白を昆虫やシジミ、ザリガニ、小魚などから必ず取っている筈だ。逆に生肉のみ食べているイヌイットは、プランクトンなど植物を食べている小魚も食べているから健康である。だがどちらかと言えば、肉食が多いヨーロッパ系の方がスタミナがあるようだ。肉食か草食かは、遺伝ではなく、家族による

「刷り込み」が主体のようである。

◎アルビノとは

動物学的には、メラニン色素の生合成にかかわる遺伝情報の欠損により、先天的に、メラニン色素が欠乏する遺伝子疾患の有る個体を言う。先天性色素欠損症、白子症などともいう。又その個体を「白子(しらこ)」という。

この反対語は「メラニズム」である。白っぽい皮膚の両親から黒っぽい子が生まれる。

植物にもあり、緑の色素を欠損した突然変異がある。このような個体は、独立栄養ができない為、種子の栄養を使い切れれば枯死する。

人のアルビノの個体は、体毛や皮膚の色は白く、瞳孔は毛細血管の透過による赤色で、劣性遺伝や突然変異により発現する。白うさぎや白蛇も有名である。アルビノは、日光の紫外線による皮膚の損傷や皮膚がんのリスクが高い。動物でも外部から発見されやすく天敵に襲われやすく、生残は稀となる。しかし生残したものは神聖なものともみられ、信仰の対象となる。また、観賞用となっても人気は高い。但しアルビノは正常な遺伝情報により、「白化」した「白変種」とは異なる。

アフリカ東部には、アルビノの人には特別の力が宿ると信じられ、殺されて肉や内臓が売却され、アルビノは・殺人・誘拐が後を絶たない。人のアルビノはメラニンの量により、プラチナブロンド(白金)からブロンド(金髪)まである。メラニンとは、日焼け(サンバーン)やDNAの破壊などの紫外線の害から身を守る効果がある。例えばUVカットの眼鏡(サングラス)を用いる。建物のガラスもUVカットのフィルターを貼り付ける。アフリカでは、アルビノの女性は特別の力を持っている

と信じられているのでレイプなど被害が深刻である、2018年までの過去10年間にアフリカ28か国で約700件のアルビノに対する襲撃事件が発生している。

*人以外の動物のアルビノ

- ①白兔・アナウサギはジャパニーズホワイトという品種がある。
 - ②だいくねずみ・ドブネズミのアルビノ化で、主にペット用。
 - ③馬・白馬は神聖視される。
 - ④ハツカネズミ・主に実験用マウス。
 - ⑤金鱒・中国で、アルビノ化したニジマス。鮭科のアルビノは優性遺伝のため養殖は容易。珍重され、祝儀料理。
 - ⑥白蛇・山口県岩国市に白蛇が多い。国の天然記念物。信仰の対象で大切にされている。
 - ⑦弁天鯰・琵琶湖で見られ、琵琶湖大鯰は、弁天の使いとされる。その他黒鯉↓緋鯉、フナ↓金魚。
- 植物では緋牡丹サボテンは、ハシラサボテンに接ぎ木すれば、枯死しない。



【特別企画】

打田升三の平家物語

巻第十一 (三一・一)

・三日平氏のこと

・藤戸のこと

・大嘗会之沙汰のこと

近世日本の歴史は十七世紀初頭に關ヶ原合戦の対応で失敗し徳川家康に何とか勘弁して貰った外様大名と其の家臣たちが、弱体化した幕府を見て「時至れり！」と決起するところから始まったので、何となく強引でござらない面がある。幕府を倒す口実に、永い年月も放って置かれた天皇制が利用され、其の後は軍部が権力を握る大義名分として「天皇の軍隊」と言う觀念が作られ、国家に都合の良い神話と創作された歴史とを国民に押し付けた疑いもある。その為には真実を求めようとする歴史学は異端視され排斥される傾向にあるが、良いことも悪いことも歴史は真実だけを伝えるべきであり、歴史の本来とはそういうものである。

国家の成立に關わる記録が、桃から生まれた桃太郎レベルの話に置き換えられたとすれば国民は犬・猿・雉と同様に黍(きび) 団子程度の恩恵に感激するように洗脳されて誤った歴史観を持たされ続ける……それこそ民族の悲劇だと思う。近年は一部の政治家が思想的に明治時代へと逆行したがる風潮もあるように思えてならないが、真の歴史家は従来の説に疑念を抱き、次々と画期的な論を展開されておられるのは喜ばしいことである。

平家物語には仏教説話的な要素も濃いですが、神仏の時代から人間の時代へと移り変わる平安末期(鎌倉

前期)に現職天皇と皇位の象徴とする「三種の神器」を擁しながら、逆賊として討伐された平家一族の興亡記であり、其の終末は明治維新で一夜にして朝敵にされた徳川幕府の場合とも類似している。「勝てば官軍……」という言葉が重い。

平家を滅ぼした源頼朝は鎌倉幕府を開いて明治維新まで続く武家政治を強引に開始するのだが、明治の文豪・幸田露伴は、其の道筋を最初につけた人物として平将門を挙げています。皮肉なことに平将門を討つたのが同族で平家の始祖とされる平貞盛である。日本の歴史で中世・近世に亘る「武士の時代」は常陸国・下総国(茨城県)から始まったと言えないことも無い。その常陸国ゆかりの平家も何処で歯車が狂ったか、遂に滅亡の時を迎えることになって今回最初の章段は「三日平氏」からである。物事に飽き易い性格を「三日坊主」と言うが、此の場合は平家側勢力の必死の抵抗であるから、気の毒な想いが隠せない。

三日平氏(みっかへいし)のこと

平家の先行きに失望して熊野の海に飛び込んだのは、本来ならば平家嫡流であるべき平維盛と、忠臣の与三兵衛重景、それに石童丸少年であったが、船頭代わりについて来た武里も行き掛かりで維盛の後を追おうとした。それを念仏で送っていた瀧口入道が止めて「維盛殿の御遺言に背いてはいけません！今は後世を弔うことが大事である……」と涙ながらに説教をした。武里は身分の低い者であったが、主君に取り残された絶望感で維盛から託されたことを忘れていた。悲しみの余り、舟底に臥して嘆き悲しむ様は、その昔、釈迦が修行の為に俗世を離れて北インドの山中に入られた際に従者が共に出家を望んで

許されず、愛馬を託されて王宮に帰った悲しみも是に過ぎ無いと思える。

瀧口入道たちは暫くの間、舟を海上に留めて維盛たちが浮き上がってくるかと見守っていたのだが三人共に深く沈んで見えなくなつた。気を取り直した武里も加わり舟の上で経を読み、念仏を唱え「過去聖靈一仏浄土へ死者の霊が極楽浄土へ行けるように」と祈る姿は哀れと言う他はない。その中に夕陽も西に傾き海面も暗くなつてきたので名残は尽きないが港へ戻つて来た。漕ぎ戻る舟の櫂の雫(かいのしずく)、残つた者の涙の雫、いずれも見分けがつかないほどの悲しみである。

やがて瀧口入道は高野山に帰り、武里は泣く泣く屋島の平家陣営に戻つて行った。武里は入水した維盛の弟の新三位中将資盛に維盛が残した手紙を渡した。資盛は「ああ、嘆かわしい。(兄上は)私が頼りにしていた程には私たちの事を思っていて下さらなかつたのか。池の大納言(頼盛)のように源頼朝に心を通じて都へ行かれたのであらうと、大臣殿(宗盛)や二位殿(時子)に疑われて私たちも冷たくされたのに、まさか那智の海に身を投げられたとは……その様な覚悟ならばなぜ打ち明けてくれなかつたのか……死に場所を共にせず別々になるのは悲しい。何か残された言葉は無かつたか？」と問えば、武里は次のように答えた。

「維盛殿が仰せられたのは」西国にて左の中將殿(重衡)が行方不明となり、一谷で備中守殿(師盛)が討たれてしまつた。もしも私が其の様になつたらば(残された妻子が)どれ程、心細く思うであらう。それが気に掛かつて平家の陣中に居られなかつた……その様に言われて、唐皮、小鳥(平家相伝の家宝)のことまで細々と遺言をされてから熊野灘で入水されました。私も、其の時にお供すべきでしたが、

最後のお言葉を皆様にお伝えするように命じられ、此処に戻って参りました：今は生き長らえようと思いません。」

言い終わった武里は袖を顔に当てて泣き伏したので、三位中将維盛に良く似た資盛も武里を宥めるほかは無かった。是を見た周りの武士たちは、気の毒に思い此処彼処で同情の涙を流していた。

宗盛も二位尼も「此の人（維盛）は池の大納言の様に頼朝を頼って都に行つたとばかり思っていたが、そうでは無かった：気の毒な事をした」と改めて、その死を嘆き悲しんだのである。

話は変わり寿永三年四月一日、鎌倉に居る前兵衛佐（従五位下）源頼朝は正四位下に叙された。従五位下からは従五位上―正五位下―正五位上―従四位下―従四位上―正四位下と上がってくるのだが其れを一気に飛び越えて来たのである。此の人事は木曾義仲追討の賞と言われた。

同月三日、保元の乱に敗れて四国に流された崇徳院（第七十五代天皇）を神様として祀るように、合戦が有つた大炊御門の付近に社を建立して遷宮の儀式が行われた。ただし当時の後鳥羽天皇には知らされず後白河法皇の独断で実施された。当時、平家は四国に居たので、崇徳上皇の霊が平家に味方するのを防ぐ目的であつたかも知れない。

五月四日、池大納言頼盛（平清盛の異母弟・母は頼朝少年の助命に尽力した藤原系の池禪尼・平忠盛の後妻）が都を出て関東に下つた。源頼朝は「貴方のことは全く粗略に思いません。亡くなられた池殿が御出でになられたように思います。其の御恩を大納言殿（頼盛）に御返しします」と神仏に掛けた誓約書を何度も頼盛に送っていたので、平家都落ちに際しても頼盛は留まっていた。しかし「：頼朝が許してくれても他の源氏がどうであろうか？」と心

配をして都を離れる決心がつかずにぐずぐずしていた。鎌倉からは何度も早く来るように催促があつたので遂に関東行きを決めた。

此の時に平家一門末流で、平重盛の遺骨を未亡人と共に護つて常陸国へ来た平貞能の従兄弟になる弥平兵衛宗清という武士があり、平家家中では先祖代々随一の武士と称されていた。其の宗清も源頼朝から平頼盛と共に鎌倉に来るように言われていたのだが行こうとしなかった。宗清は池禪尼が平清盛に頼朝少年の助命嘆願をした際に「良い印象」を伝えていた人物である。頼盛から「なぜ鎌倉に行かないのか？」と問われて「：貴方様は、こうして無事に過ごされていますが、平家の皆様は西海で不自由をされている事を思えば心苦しいので少し考えており、後から参ります」と答えた。

頼盛は不愉快に思つて「：平家一門から離れて都に留まったことは、自分でも人に誇れる行為だとは思っていないが、人間であるから無為に此の身は捨て難く命も惜しい。そこで気が引けながらも平家一門とは行動を共にしなかった。そうしたからには頼朝の招きにに応じて鎌倉へ行かざるを得ないであろう。私が遙かな旅に出るのに、宗清は同行を断り見送りもしてくれない。私のすることが気に入らないならば、平家都落ちの時に、なぜそれを言ってくれなかったのか。大事も小事も、全てお前に相談したではないか！」と怒つた。

宗清は姿勢を正して「尊いお方でも身分の低い者でも命ほど惜しいものは無く、世間を捨てても其の身は捨てられず、と申します。私は鎌倉に招かれて行かれることを悪いと申し上げているのでは有りません。兵衛佐（頼朝）も、危うかつた命を（池禪尼に）助けられたからこそ現在の地位が得られたのです。私も今は亡き尼御前（頼盛の母）の御命令で流

罪の頼朝を近江国篠原宿まで送りました。その事を頼朝が今でも忘れていないと聞いておりますので頼盛殿と共に鎌倉に行けば、品物を贈られ接待を受けるでしょう。その事を西国に居る平家の人々に知られることが恥ずかしくてならないのです。どうかお許し下さい。

貴方様は平家都落ちにも留まられたのですから、どうしても（頼朝に呼ばれたからには）鎌倉へ行かない訳にはいかないでしょう。戦場に行かれる場合ならば私も第一陣にお供しますが、今回は頼朝の招待ですから道中の心配も無いと思います。もし私の事を聞かれたならば、病氣とでも答えて置いて下さい」と申し述べた。是を聞いて心ある供の者は深く感じ入つて涙を流した。頼盛もさすがに恥ずかしく思つたが都に留まっても居られず、宗清を残して鎌倉へ向かつたのである。

五月十六日に、池大納言頼盛は鎌倉に到着した。知らせを聞いた源頼朝は直ぐに会いに来て、先ず「宗清はお供をして来たか？」と聞いた。「それが残念なことに体調を崩しまして、参上することが出来ません」と答えると、頼朝は気落ちした様子で「どうしたと言うのか？何か考えが有つての事とは思いますが：私は昔（平家に捕らわれた際に）何かにつけて宗清が親切にしてくれたことが忘れられないので恩返しをしたい：其の為に呼び寄せたので、会うことを楽しみにしていた。どうして来てくれなかったのか？」と心から残念がった。

頼朝は、宗清の為に領地を与える証書を初め馬や鞍や鎧など多数の下賜品を準備していた。其れに合わせて有力大名たちも引き出物を準備して待っていたのに宗清が来なかつたので、頼朝以下の者たちは失望し物足りなく思っていたのである。

六月九日、池大納言頼盛は鎌倉を出て都に戻る

ことにした。頼朝は「此の俣、暫くは此の地で暮ら
しなさい」と言ってくれたのだが「都のことが心
配で…」と無理に戻ることにした。宗清が来なかつ
たので何となく居心地が悪かったらしい。頼朝は、
後白河法皇宛てに手紙を書いて「平頼盛が所有して
いた庄園・領地は一か所も相違無く与えること。平
家一門の官位は剥奪されたが平頼盛は大納言に復さ
せること」を申し入れた。そして鞍(くら)置き
馬三十頭、裸馬三十頭、長持三十棹に矢羽根(鷹や
鷲の羽)・衣類などを入れて頼盛に与えた。是を見た
大名たちも思い思いに土産を持参したので馬だけ
も三百頭も集まった。平家一門の中で、此の人だけ
は命が助かったばかりか徳が付いて鎌倉から戻つて
来たのである。

六月十八日、平重盛の遺骨と重盛夫人を護つて
常陸国に来た肥後守貞能の伯父である平太入道定次
を大将とした伊賀・伊勢両国の平家勢が近江の国に
攻め込んで来た。地元の源氏方勢力が是を迎え討つ
て全滅させた。伊賀・伊勢は平家の地盤であるから
相伝の家人が居て旧恩を忘れずに行動したことは立
派であるが、時代は既に平家滅亡の寸前である。世
の人は是を「三日平氏」と呼んだ。ただし「三日平
氏」と呼ばれた小規模合戦は此の戦さでは無かつた
…とする説もあるらしく、滅亡を前にした平家の扱
いが難になってくる。

話は変わって、小松三位中将維盛の北の方は夫が
既に熊野灘に沈んだことを知らない。本人からの連
絡も絶え、風の便りも届かなくなり、何事が有った
かと気掛かりにはなつたが此方から連絡する手段も
無いので心配をするしか無い。月に一度は必ず手紙
が届いていたのに…と心待ちをしながら居たのだが、
その頃に「三位中将は屋島にも居ない」と言う噂が
伝わって来た。

あまりのことに驚き、取り敢えず真偽を確かめ
ようと苦心をして屋島に人を送った。今度はその使
者が中々戻って来ない。夏が過ぎて初秋の頃に使い
の者は戻って来た。北の方は余計なことは言わずに
「(維盛殿は)如何に如何に！」と問い詰めた。聞か
れた者は正確に答えるしかない。「…過ぎし三月十五
日の明け方に、密かに屋島を出られ、高野山に参ら
れました。其処で髪をおろされてから熊野へ入られ
ました。熊野では後々のことを細かく申され、やが
て那智の海に御身を投げさせ給いし由、最後の時
まで御側に従っていた武里と申す者から聞かされまし
た…」と申し上げたので、北の方は「やはり、そう
であつたか！(便りが途絶えたのは)何か大事と思
つたのが当たつた！」と、その場で床に伏してしま
い若君・姫君たちも声を上げて泣き悲しんだ。

若君の乳母である女房が涙ながらに声を上げて
「此の事はかねてから覚悟をされていたのに今更、
嘆き悲しまれて、どうなりますか…本三位中将殿(重
衡)のように源氏に囚われて都に連行されたりした
ならば、あれこれと心配もつることでしようが高
野山で髪を切り仏門に入つて熊野へ行かれたのは死
後の成仏を願われたことで、其の事に依つて安ら
かな御最後が得られたならば、是は嘆きの中の喜び
と申すべきでしょう。どうか御遺志を違わずに如何
なる岩木の隙間でも頼つて残された幼き方々をお育
て申し護り通すように、強いお心で居て下さい！」
と慰め励ました。

しかし北の方は深く傷ついていて、とても苦境
に耐えてゆけるようには見えず、やがて髪を下ろし
仏門に入つて平維盛の後世を弔つたのである。

(続く)

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」
仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の
入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)

HP: <http://www.furusato-kaze.com/>